

回想記紹介

青木晴夫少年が見た朝鮮の風景

青木 晴夫
鄭大均・解説

<解説>

2022年2月24日はロシア軍がウクライナへの侵攻を始めた日であるが、その日、カリフォルニア州エル・セリットの自宅で、言語学者の青木晴夫（1930～2022）が逝去した。享年91歳。日本統治下の朝鮮全羅北道群山府で生まれた青木は、予科練で「内地」（日本）に向かう15歳のときまで朝鮮の地で暮らし、その後、広島高等師範学校を経て広島大学で学生生活を送った後、1953年に渡米。以後は主にはカリフォルニア州のバークレー校近郊で暮らし、その地で亡くなっている。

青木晴夫を知る人はいまや僅かしかいないと思われるが、日本では『滅びゆくことばを追って—インディアン文化への挽歌—』（三省堂、1972年、のち岩波書店、1998年）の著者として記憶している人がいるかもしれない。1960年初夏、カリフォルニア大学バークレー校で言語学を専攻していた青木は、アメリカ北西部のアイダホ州にあるネズ・パース（Nez Perce）族の保護地に向かい、そこで先住民たちと生活をともにしながら、その言語調査を始める。『滅びゆくことばを追って』はその成果で、言語学者の千野栄一は「言語学者にしておくのはもったいないような文才の持主で、しかも書かれた内容がしっかりしているという願ってもない本」と言い、「言語の調査について書いたものは面白いものが多いが、この本はその中でも白眉である」（『ことばの樹海』、青土社、1999年）と続けている。

青木の日本語著書には、他に『アメリカ・インディアン—その生活と文化』（講談社現代新書、1979年）や『マヤ文明の謎』（講談社現代新書、1984年）があり、1989年には“Nez Perce Oral Narratives”（カリフォルニア大学出版局、1989年）の転写と翻訳で、新村出賞を受賞している。また故郷の群山で祖母の背中におんぶされているときからの機関車好きであったという青木には、『ヨーロッパ・アメリカ汽車の旅』（講談社、1981年）の著書があり^{註1}、『鉄道ファン』や『鉄道ジャーナル』『Rail Magazine』誌には八幡谷重^{はちまんたいただし}という変わった筆名で記された数多くの記事があり、また『北米大陸に汽車を追って』（エリエイ出版部、1987年）の著書がある。

ネズ・パース語研究で博士号を取得した青木は、やがてカリフォルニア大学バークレー校で教鞭を執るようになるが、氏の著書である“Nez Perce Dictionary”（カリフォルニア大学出版局、1994年）を使って先住民言語を習得し、その専門家になったというネズ・パース族研究者もいる。一方、バークレー校で氏の初級日本語クラスや日本語学等のクラスを受講した学生のなかには、学生に^{対面}しながらバックハンドで見事な漢字を黒板に書いてみせる青木先生の妙技を思い出す人もいるに違いない。

青木氏と知り合うことができたのは、日本に住む友人のウェザロール・ウィリアム氏が青木氏と親交を持つかつての教え子であったからである。青木氏とメールでの通信が始まったのは、2020年の9月のこと。私は日本統治期に記されたエッセイをテーマに著書を準備していることを伝えるとともに、朝鮮での思い出の記を記してほしいと頼んだのだが、すると意外に早く原稿が送られて来た。実はそれ以前に拙編著『日韓併合期ベストエッセイ集』(ちくま文庫、2015年)を送っていたが、氏はその第一章「子どもたちの朝鮮」^{註2}にあるエッセイに触発されたのだという。ただし迅速に思い出の記を記すことができたのは、氏に“Stories From My Life”(California Language Archives, 2014)の作品があったからであろう。氏には思い出の記をいつか自著で紹介する、と約束した。

幼少期の朝鮮体験を記した日本人の作品というと、1970年代から90年代にかけて書かれたものが思い浮かぶが、よく見られるのは朝鮮での過去をノスタルジックに回顧することを自らに禁ずるという態度である。青木氏の作品は書かれた時期も年令も場所も大きくずれているが、なによりもずれているのはその語り口で、朝鮮での過去をノスタルジックに回顧することを自らに禁ずるといような不自然な態度がない。日本人の思い出の記にしばしば感じる政治的な自己抑制の態度が、青木の作品にはない。だから安心して読めるし、文章も生き生きとしている。

ただし青木氏は、原稿に「ただの子供の見た朝鮮」という表題をつけてきた。「ただの」とは「政治家や軍人の子ではない」の意であり、「見た」は「新聞や学校で習ったまた聞きではなく、この目で直接見た」の意であるという。1945年末、青木一家は「浜松事件、直江津駅リンチ殺人事件」に類する仕打ちを受けて朝鮮を去るが、その頃晴夫は海軍飛行予科練習生として防府の通信学校にいたから、現場を直接「見た」わけではない。だからその件については記していないのだという。いずれも納得できるが、しかしこの表題をそのまま使うことにはためらいがある。「青木晴夫少年が見た朝鮮の風景」とはそれに換えたもので、内容には忠実であると思う。

青木晴夫の人物像についても簡単に記しておきたい^{註3}。1945年8月末、海軍予科練を除隊となった青木はやがて広島高等師範学校に入学するが、1949年新制の広島大学ができるとその試験に合格して広島大学文学部一期生として卒業する。フルブライト奨学生として日本を離れたのは1953年のことで、カリフォルニア大学ロスアンゼルス校で修士課程を終えた後、1958年カリフォルニア大学バークレー校に移り、言語学を専攻。ネズ・パース語研究で博士号を取得したのは1965年のことである。青木にはその後、一時相模工業大学で教えていた時期があるが、その後はバークレー校で教鞭を執り、退職後はカリフォルニア大学バークレー校の東アジア言語文化研究科の名誉教授で、ネズ・パースの人々や研究者との絆は最晩年まで続いた。

朝鮮で生まれた青木晴夫の両親の出自についても記しておきたい。青木の故郷である全羅北道群山府は、当時日本(内地)への米の移出港として知られた町である。父の山田明良は長崎県諫早市にある長崎県立農学校を卒業。京畿道水原府にある農事試験場に技手として勤めた後、群山の埠頭にある朝鮮総督府穀物検査所に配属され、米の検査官の仕事に従事していた。その後、米穀倉庫株式会社という倉庫を管理する会社に引き抜かれて群山を離れる。父方の祖父母はいずれも農家の出身である。

一方、母方の祖父である青木亀太郎は山口県厚狭郡吉部村の出身である。大阪で大工

の修行をした亀太郎は芝居好きで、浄瑠璃語りの三味線弾きであった多田マサと結婚し、青木晴夫の母である長女・八重が誕生する。当時家族は大阪に住んでいたが、朝鮮の群山に車大工の店を開きたいと考えた亀太郎は海路その下調べに出かけたのだが、なかなか戻ってこない。群山は1899年に開港しているが、当時まだ鉄道がなかった時代である。裡里からの支線が開通して、群山に鉄道で行けるようになったのは1912年以後のことで、電話での連絡もできない時代であった。

帰りが待てなくなったマサは、八重の面倒を近くの少女に任せ、次の男の子を連れてどこかに姿を消してしまう。後日、大阪の家に帰ってきた亀太郎は、乳の出の悪いマサが残っていたミルクの空き缶に囲まれた幼い八重を見つけるが、自分で子育てをすることもできないので、八重を吉部村にいる母に託す。しかしやがてその母も亡くなる。母に棄てられ、今度は祖母を失った八重は厚狭郡船木町に住む叔父の家に預けられるが、ここでは家族全員の朝食の準備とともに子守の仕事を命じられる。そんな苦労を経て、八重は尋常小学校を卒業し、やがて父のいる朝鮮に向かうが、ちょうどその頃車大工の仕事に目鼻がついた亀太郎は、自らの手で「青木鉄工所」の家を建てていて、長い旅を経てやってきた八重はそこに迎え入れられる。八重はその家で父の後妻であるルイに会う。青木の思い出の記には祖母の話がよく出て来るが、祖母とはこのルイのことであり、青木晴夫は血の繋がった祖母であるマサとは会ったことがない。

朝鮮にやってきた八重は、群山の高等小学校を終えると全寮制だった釜山の高等女学校に入学する。学業成績は良好で、自由に勉強ができる生活を楽しんだようであるが、健康を害したこともあって大学進学を断念。高等女学校卒業後は群山の郵便局に勤め、そこで町の楽器店の人たちと弦楽四重奏団を作ってバイオリンを弾いたり、またカメラや三味線や茶道に関心を示す。青木晴夫は長いこと、父が給料の一部を長崎県の両親に送るため郵便局に行き、そこで母を見初め、恋愛結婚をしたのだとばかり考えていたが、後に二人は見合い結婚で結ばれていたことを知ったと言う。山田明良と青木八重が結婚したのは1920年代後半のことである。二人は祖父の建てた工場の奥座敷に新家庭を作り、三児に恵まれる。長男の晴夫に2年遅れて和子、次の年に次男吉雄が生まれている。

青木晴夫の思い出の記の舞台は、1930年代から40年代にかけての、主には群山の地である。かつて寒村だった群山は開港とともに各国居留会ができ、日本人もいれば朝鮮人や支那人やその他の外国人もいるという町になる。1928年の統計によれば、群山府人口は日本人(内地人)8245人に対して朝鮮人16075人、外国人538人である。

思い出の記は青木氏の幼少年期の体験を綴ったものであるが、幼年期の記憶も多くて、そこには母より祖母がよく登場する。生まれ故郷の伊予弁、標準語、朝鮮語のチャンポン語を自由に熟す祖母ルイのことである。もちろん埠頭にある穀物検査所に毎日通う父や、米を運ぶ牛車を作る車大工の祖父も頻繁に登場する。加えて自宅の鉄工所には朝鮮人の見習いがあり、隣家には朝鮮人の銀細工屋や飯屋があり、日本語と朝鮮語が入り混じる賑やかな環境である。朝鮮での過去をノスタルジックに回顧することを自らに禁ずるという態度で書かれた日本人の作品によく出て来るのは、朝鮮人との緊張や葛藤の体験である^{註4}。しかし青木の作品に見られるのは、むしろ人々への好奇心であり、緊張や葛藤の体験はあったのかもしれないが、それが顕在化している風はない。これは青木が90歳のときに記した作品である。人生の暮れ方を迎えた著者は、その人生の始まりの頃に出

会った人々への感謝や思慕の念を込めて、思い出の記を記したのかもしれない。青木に言葉を話す以前から物を識別する才能があったとか、優れた音感があったことが記されているのは、青木が後に言語学者になったことを思うと興味深い。以下、青木氏が記した思い出の記を紹介するが、改行や誤字の訂正等、文章にいくつかの修正を加え、註を加えた。

註

- 1 青木はまだことがしゃべれないうちから、祖母の背中で汽車を見に行こうとせがんだ。なんでも駅の方角を知っていて、そちらの方へ祖母の耳を引っぱって知らせたのだという（『ヨーロッパ・アメリカ汽車の旅』講談社、3頁）。
- 2 『日韓併合期ベストエッセイ集』の第一章に収録されているのは、五木寛之『運命の足音』（幻冬舎文庫、2003年）、安岡章太郎『僕の昭和史』（新潮文庫、2005年）、田中明「私と朝鮮とのあいだ」（『常識的朝鮮論のすすめ』朝日新聞社、1981年）、任文桓「日本人学校と新付日本人学校」（『日本帝国と大韓民国に仕えた官僚の回想』ちくま文庫、2015年）、金素雲「回想の牧の島」（『近く遥かな国から』新潮社、1979年）、森崎和江「詩を書きはじめた頃」（『二つのことば 二つのころ』筑摩書房、1995年）、日野啓三「遠い憂鬱」（『私のなかの他人』文藝春秋、1975年）、「ポプラ」（『日野啓三自薦エッセイ集 魂の光景』集英社、1998年）の作品である。
- 3 本稿は青木が記した思い出の記の前半部分にあった「まえがき」と「群山」の部分を活用している。また“Stories From My Life”（2014年）や「青木晴夫氏インタビュー」（広島大学文書館紀要（19）60-83,2017-02-28）の記事及び青木氏とのメール通信で教えてもらったことを資料としている。
- 4 それが典型的に見てとれるのは、たとえば本田靖春『私たちのオモニ』（新潮社、1992年）、安岡章太郎「ああ戦いの焼き栗…」（『文藝春秋』1971年新年特別号）、旗田巍「私の朝鮮体験」（『朝鮮と日本人』勁草書房、1983年）のような作品である。

（鄭大均記・東京都立大学名誉教授）

朝鮮市場

僕の人生最初の一年はオンブしてくださったルイばあさんの背中^{のこくず}で過ごしたと言って良い。背中から降りている間は祖父の足元で、鋸屑^{かんなくず}や鉋屑の新しい木の匂いの中で這い這い^{のこくず}をしていた。最初の朝鮮人との付き合いもそこで始まった。

その頃は各家に冷蔵庫はなかったので、母と祖母は毎日朝鮮市場に買い物に行った。場所は北側は群山駅と群山港駅の間、南側は堀で満ち潮の時は道の近くまで濁った水が上がって来、引き潮の時は20メートルほど下の泥底が見えた。同じ黄海に面し1883年に開港した仁川での大潮の干満の差8メートル強ほどではないが、大きな船は出入りしなかったのも、そのあたりに理由があったものと思われる。

東側は群山駅の貨物置き場、西側は郊外から町へ入る主要道路で、何本もある貨物線を越えるため、いつも旗を持った踏切番がいた。内地人の市場もあったのだろうが、何しろ海につながる堀には漁船が来てその日に取れた魚を売り、町へ入る前の野菜が買えるので、これ以上の市場はなかった。しかも僕らには絶好の社交場でもあった。

この市場の売り手はほとんどが朝鮮人で、買う人は朝鮮人、内地人、シナ人など色々だった。僕はお昼過ぎから買い物かごを下げた母と、おんぶ役の祖母と一緒にほとんど半日を過ごした、そのわけは一軒一軒値段も品質も違うので、一品ごとに値段の交渉をするからである。そのやりとりが毎日顔を合わせている間柄だから、売り手にも買い手にも実に楽しいひと時なのである。

この市場には、ずらりと並ぶ売場が二本の通り道の両側に四列に並び、最後の列の裏側は堀に面し新鮮な魚が船から運び込めるようになっていた。通り道はお天気のいい時は埃っぽく、雨の日は高下駄でも足が泥だらけになる程、深いぬかるみだった。

市場は色と匂いと人声の狂宴だった。円錐形に積まれた唐辛子の真っ赤な山、天井まで井桁に積み上げられた灰色の干し明太、いま頭から降ろされたようなみずみずしいモヤシの黄色、さっきまで畑にあった野菜の緑、その賑わいは祖母の背中^{のこくず}の僕にまで伝わってくる。

そこでは言葉はいらない。買い手は「ピッサヨ」(高い)、売り手は「アニヨ」(いいえ)だけで済む。安いという単語は買い手には要らないし、「ネエ」(はい)と言わなくても、にっこりと笑うだけで商談成立である。両方とも長い間の友達なのである。

未だに忘れられない美味しい物の一つに、辛子の葉がある、唐辛子を収穫した後の木、というか成長前に採ったとか、まだ辛味の少ない緑の唐辛子のくつついた、ちょっと辛味のある野菜である。もう一つは長さ10センチほどの小さい魚で、母は「シラウオ」と呼んでいた。市場での入れ物では体は透き通って見えず、目の黒い点だけが動いているように見えた。焼いてもいいが天ぷらはうまい。この白魚は群山のような川の水と海の水とが混じる場所にだけいるそうで、博多名物のシロウオとは、名前は似ているが違う魚である。

赤ん坊が泣き止む時

僕は、^{かん}疳の虫の強い子で、よく泣いたそうだ。大人たちは二つの方法を見出した。ひとつは祖母が見出した昼間の解決法で、毎日行く市場の西側に踏切があり、米を積んだ貨車を蒸気機関車が入れ替えしていた。ここへ連れて行くと、赤ん坊はピタリと泣き止むのだった。もう一つは、父が編み出した夜の解決法で、『真宗聖典』という皮表紙の厚い本から「仏説阿弥陀経」を読み出すと、この子はコロリと寝てしまうのだった。

町の声

鉄工所といえば大変立派に聞こえるが、人は祖父ともう一人で、僕が物心ついた時には「ヤスイチ」という朝鮮人の弟子というか見習いの若者と二人だけで、米を運ぶ牛車を作っていた。

群山府は錦江という川が東から黄海に流れ込む河口の南岸の町で、中心に「府庁」があり、東端の群山駅との間に、三つに区切られた「栄町」という商店街があり、西から駅へ1丁目、2丁目、3丁目と分かれていた。祖父は、その中央の2丁目の角に仕事場兼住居を構えていた。彼が建てた時はまだ川の泥沼の埋め立てが終わったばかりで、沿地にぼつんと立っただけのお城のようだったと言う。

栄町に面した場所は西半分が木工所、東隣の角は鍛冶場で、牛車の車体や車輪は木工所、木の車に嵌める鉄の輪、組を掛ける鉤などは鍛冶場で作られ、祖父は車大工と鍛冶屋の二役をこなしていた。ヤスイチは黄色く焼けた鉄の次の打ち所を祖父が金槌で指示し、そこを大きな金槌を振り上げて叩く役目だった。ふたつの高さの違う槌音が互い違いに調子よく聞こえ始めると、仕事の順調な進みが分かった。

昼間の栄町は、「ヨンゲンムルサショ、チェンムーリーヨ」^{註1}と聞こえる呼び声で水を売る朝鮮人、鍋や釜を修繕する内地人の鑄掛屋、キセルの竹を換える朝鮮人の羅宇屋、^{らうや}「竿や、さおだけー」と物干し竿を売る内地人などの朝鮮語と日本語が入り混じって賑やかだった。一日は手押し車で、餡パンやクリームパンを売る木村屋^{註2}の太鼓の音で暮れた。

夕方になると、昼間は町のざわめきで聞こえなかったいろいろな音が聞こえてくる。その一つが砧^{きぬた}の音だった。生乾きの洗濯物を叩いてツヤを出す棒、といえば根も葉もないが、石の板に衣類を乗せてタンタンと立てる音は、芭蕉の句「声澄みて北斗に響く砧かな」を思い起こさせる。

店が閉まってしまうと、さすがの商店街も静かになる。遠く微かに「ヤクパブ サショーもち もち サショー ヤクパブ」という売り声が聞こえる。もちは日本語の餅、サショーは「いかがですか?」といった朝鮮語、ヤクパブは蒸したもち米に醤油とザラメ糖で味をつけ、松の実や干しナツメを入れた朝鮮の珍味である。夜の静寂^{しじま}を破る、懐かしい呼び声である。

冬のまだ真っ暗な寒い朝、ふと歌声を聞いたことがある。西洋の音階だ。それが日本語では「^{もろびと}諸人こぞりて」というキリスト教の賛美歌だと知ったのはずっと後で、子供の時は早く寝たので朝だと思ったが、イブだったのである。

住処

父は母の家に住むことになった。青木の家は大工の祖父が建てた。建物はコの字型で、上(北)は路地を隔てて朝鮮人の銀細工屋さんに接していた。左端は「座敷」で、何か凝った黒光りのする床柱があり、その左が掛け軸のある床の間、右側に違い棚があった。

右(東)は、栄町に面し木工所と鍛冶場があった。木工所に隣接して「居間」があり、祖父と祖母がいた。鍛冶場の二階にはヤスイチの部屋があった。横道に沿った下(南)は材木などを置く倉庫だった。

父と母と一緒に、僕は座敷に住んだ。コの字の中央には築山と池があり、金魚がいた。池の片隅には大きな甕が埋めてあって、池の上部は凍ってもその深い穴までは凍らず、金魚が冬眠するのはその中だった。庭を囲む三方には縁側があって、どこかにいつも日が射していた。奥座敷は少し高い所にあっただので、祖父母の居間までの廊下は下り坂になる。僕は大きな算盤に乗って、この坂を滑り降りたものである。祖父は算盤玉で廊下に傷がつくのを大目に見てくれた。

言葉

家の食卓では、祖父の大阪弁、祖母の伊予弁、父の長崎弁、母の山口弁が、飛び交うことになり、赤ん坊の耳には重層的な日本語が入る。しかし大人同士が話し合うときは、最大公約数的な共通語の地になっていた。みんな自分の方言と共通語のバイリンガルで、父だけが他の3人がトンボという時ヘンプ、蜘蛛という時コブというので、九州方言は本州や四国と違うことが赤ん坊にも分かった。

この赤ん坊は当たり前の話だが、生まれてからしばらく言葉は聞くだけで話さなかった。でも物を識別する力はあった。

その一例は、いつも祖母におんぶされて見に行った機関車である。機関車は内地の狭軌ではなく標準軌で、アメリカから輸入したプレイ(Prairie1型)は純度の高い石炭用に作られていたので、龍山の鉄道局の工場でプレニ(Prairie2型)、プレサ(Prairie3型)と改造され、煙室を縦長にして褐炭でも使えるようにしたプレシ(Prairie4型)があった。顔の長いプレシと顔の丸いプレサとは区別できた。

もう一つは、レコードのラベルである。家にあったのはネジを巻いて回す、音盤の溝に記録された振動が針で音として再生される、機械式のポータブル蓄音機で、祖母の好きな吉田奈良丸の『赤垣源蔵徳利の別れ』、寿々木米若の『佐渡情話』、広沢虎造の『旅ゆけば』とか天中軒雲月の『南部坂雪の別れ』の浪花節などがあった。レコードの中央にある演奏者の名前や演奏曲目は読めなかったが、ラベルの色と行の長さで区別できた。

赤ん坊の僕が話せたら、いとも簡単に説明できた現象が、周りの大人には不思議なことに見えたらしい。神童とか天才でも、内側からみれば案外ただの人なのかもしれない。

父の祖父母にはまだ顔合わせをしていなかったもので、1931年2歳の時、初めて群山を出て内地に父母と行った。この字も読めない小坊主が、自分の好きなレコードばかりをキュッキュッと引っ張り出し、せっかく好きな浪花節を聞かせようと遠いところを持って

きたが、祖父母の耳に入るまではかなりの対策が必要だったそうだ。このころ町に出た男だけが洋服で、あとは和服であった。九州の日差しは強く、日傘は飾りではなく必需品だった。

近所

柴町通は商店でない場所もあった。祖父の鉄工場がその例で、業種も人種も寄せ集めのいとも呑気な町だった。床の間のある奥座敷の窓を開けると、路地を隔てて隣の朝鮮人の銀細工屋の中庭が見渡せた。賑やかだったのはいくつかの家族が集まって、その中庭で一年分のキムチを漬ける時だった。まず荷車何台分かの白菜が運び込まれる、文字通り山ほどの唐辛子が積んであり、にんにく、塩、棗、りんご、魚介類の塩辛、などの大きな入れ物が並び、大きな甕に漬け込まれていく、いやもう大変なお祭り騒ぎである。正月には搗きたての餅をあげ、お返しにキムチをもらった^{註3}。

裏側のお隣さんは、スリチビという朝鮮人の飯屋で、大きな釜に牛の頭があり、そのだし汁がいつもググツと煮立っていた。

横丁の向かい側には、北が柴町通に面した東文堂という朝鮮人の紙屋さんで、オンドルに敷く厚い油紙などのほかに、ハングルの和綴じの本も売っていた。そこの長男は、中学で一級上だった。

その隣は朝鮮人の徐さんの精米所で、粳を玄米にしたり玄米を白米にしたりする機械がたくさんあり、その奥に徐さん一家の住まいがあった。そこの長男は中学の3年上で、柔道4段の猛者だった。

その隣は2段か3段、段を上った先にガラスの二重戸がある、いかにもとっつきにくい沈さんの薬屋があった。精米所の騒音と米糠などが入らないように作られていたのかもしれない。沈さんはものすごく綺麗好きで、受け取った貨幣は全て消毒液にしばらく浸し、紙幣は洗濯してアイロンをかけるという噂で、われわれには近寄りがたい店だった。

このチンヤッパン(沈薬房)のおじさんは、新し物好きでもあり、柴町で最初にラジオを買ったのもチンさんである。木の箱の表面に3つのつまみがあり、真ん中のつまみの上には小さな扇形のメモリのついた窓があって、中には電気が灯っていて、小さな家のようなだった。箱の上からは黒いエボナイトの大きなラップが出ていた。

柴町の向かい側には、わが木工所の前に、西平さんという岡山県から来た「豆屋」があった。店頭には並べられた木の箱には、炒った空豆や落花生などが入れてあり、香ばしい匂いがいつも漂っていた。

その右隣は、絹織物を売るシナ人の店で、お国の祝祭日には青天白日の国旗を出す。店はありとあらゆる色の組織物の巻物が壁に立てかけてあり、夜遠くから見ると闇に浮かぶおとぎの国のように見えた。

その右隣はわが鍛冶場の斜め向かいで、増岡さんという熊本からの一家で、売っているのはタバコ、たわし、バケツなど、食べられないものならなんでもあるみたいな便利なお店だった。そのくらいが幼稚園に行くまでの、僕の行動範囲だった。

卵屋

市場まで行かなくても家まで売りにくる物もあり、卵はその一つだった。卵は長いわらづと(藁苞)に入れ、一個入れるごとに一本の藁で縛って、わらづと一本に十個入っていた。卵屋さんは古くからの知り合いの朝鮮人である。

これは祖母の担当だった。「こんにちは」という声で卵売りとなると、祖母が上がりかまち櫃へ出て、まずお茶を出す。まずお天気の話、それが済むとおもむろに「どれ」、と卵の話にかかる。祖母はわらづとから卵を取り出し、明るい方に向けて中身の明るさを調べる。暗い方が新しいのか古いのか忘れたが、こう一つ一つ調べて、新しいのを要り用だけ別にする。

次の段階は値段の交渉である。卵屋さんは値段を言う、祖母は必ず「ピッサヨ」といい、卵屋は「アニヨ」と返す。それから日本語と朝鮮語を混ぜて「なぜそんなにピッサなの」「鶏の食べ物が高くなった」「いや高くなっていない、奥さん何人」「二人」「だからいけないの、奥さんは一人でいいの」「いやそう言うわけにも」と、もう何度も聞いたやり取りの繰り返しである。これは一種の儀式なのである。

「これいくら」「5銭です」で5銭払うのは、あまりにそっけなく礼儀に反するのである。こういう場面から、国際間の交渉は、相手のやり口を知っておかなくては馬鹿にされることを教わった。

ルイばあさん

僕の一生で一番お世話になったのは、祖父の後妻で、血は繋がっていないが、赤ん坊の時からホンソ息子といい^{註4}、朝、目が覚めると「大きなあれ」と、文字通り体を撫でさすってくださったのはこのばあちゃんである。

長いキセルでタバコを吸い、臨機応変に生まれ故郷の伊予弁、標準語、朝鮮語とのチャンポン語と自由自在に行き来でき、物買い駆け引きの達人だった。暇があるとチング会という近所のおじさんたちを集め、大きな算盤と台所用の大きなマッチ箱を手元に置いて、花札の胴元になった。賭けるのはお金ではなくてマッチ棒である。チングは友達という意味である。

タバコ銭が切れると、近くの友達そうめんやの素麺屋に「束をしに」行った。機械から出てきて、干した素麺を一定の大きさの束にまとめる作業である。小遣い銭が手に入るとともにお喋りが楽しめたので、こんないいことはない。

ばあちゃんの話の一例を挙げると、八幡浜の祭りにお父さんに行って、土産を買って帰る時のこと。いくら歩いても歩いても村に帰れない。疲れて木陰に腰を下ろし、一休みしていると、人が来て「あんたがたキツネにだまされたんだよ」と言ったとたん、空が明るくなった。「あそこの木にキツネがいて、尻尾を上に向けるとあなた方はその坂を登る、尻尾を下に向けるとあなた方は同じ坂をまた降りる、何か美味しいものを狙ってたんだね」とその人は行ってしまった。それから家には何事もなく帰り着いた。

こういう話って、本当にいいものである。教わった言葉に、「蓮根を食う」というのがあっ

た。知っていても知らないことにするという意味だが、「知らんぷり」とはまた違って、「知ったかぶり」の反対に近く、悪い意味はない。

祖父

祖父は頑固で癩癩持ちだが、腕はいい車大工だったのである。鉋屑かんなくずを見れば大工の腕がわかるというだけあって、祖父の鉋屑は薄紙のようにどこも同じ厚さだった。節くれだった指の二本には爪がなく、大阪での修行の厳しさが痛々しかった。

鍛冶場では時々、真新しい木の車輪が真っ赤に焼けた鉄の輪に金槌で叩き込まれ、木が焦げ出す前に屋外の長細い「冷やし桶」まで運び、冷水の中で一回転させる「焼き嵌め」が行われた。急に冷やされて、湯玉と轟音とともに縮まる鉄の輪に木の車輪が締めつけられる焼き嵌め兼焼き入れは、師匠と弟子の別なく一体となった、阿吽の呼吸を要する仕事である。その終わりは祖父のホッとした表情で分かった。

冬には、鍛冶場で火を起こしながら「入れてやれ」と、横丁で震えている家のない朝鮮人たちを入れ、「何かないか」と言われて、祖母は、昨夜のご飯と温めたおかずを持って来た。火を落とすと、壁に沿って座っていた人たちは頭を下げて、静かに出て行くのであった。何年か経って二階から屋根に這い出した弟を目ざとく見つけ、命を救ってくれたのはこの人たちだった。

ある日、仕事が終わって、夕日のさす木工所で祖父は一服していた。僕を見ると「何がいい？」と聞くので、すぐ「汽車」と答えた。「よし」と立ち上がると、直径10センチほどの丸太を長さ20センチほどに鋸で切り落とした。ははあ、胴体だなと思う、次に少し舗装部を厚さ2センチに幾つも切った。ははあ、車輪だなと思う。こうしてみるみるうちに白木の蒸気機関車が出来上がった。孫の喜ぶ様子を祖父は楽しみ、一日の仕事の疲れも厭わず、僕のために手作りのオモチャを作ってくれる世界一のおじいさん、忘れられないひと時であった。

お使い

祖父は紙巻を、祖母は長いキセルで刻みを吸った。ある日刻みが切れて、タバコを売っている斜め向かいの増岡さんの店へ、お金を握って「僕が行ってくる」と飛び出した。途端に若い朝鮮人の乗った自転車にぶつかり、右眉のあたりに傷ができて、血が出た。

祖父はカンカンに怒って「タバコぐらい自分で買いに行け」と祖母を叱りつけ、自転車の若衆は謝り、僕はまだタバコを買わなくてはと、未完の使命に燃えていた。一番悪いのは前後左右を見ないで飛び出した僕だったが、それがうまく言えなかった。

翌日、自転車の若者は菓子折りか何かを持って見舞いに来た、祖父は「君は悪くない、悪いのはこっちだ」と礼を言った。祖父は家では晩酌をやったが、外の飲み会には必ず食事をしてから出た。「空き腹に酒が入ると馬鹿なことを言ってしまう」というのが口癖だった。

幼稚園

幼稚園は街の中央部を過ぎた丘を背に、東を向いた赤レンガの建物で、子供の足では歩いて40分の距離だった。することといたら、絵を描いたり歌を歌ったり遊戯だった。絵は必ず丸から八方に赤い線が出ている太陽があり、それに船とか汽車を描いた。

ある日、父が僕の描いた絵を見て、晴夫ちょっとおいでと言う。行って見ると、まるで友達に言うように、煙突の煙で分かる風向きと、旗の向きで分かる風向きが逆だということだった。僕には描いた物の不自然さがわかった以上に、小さな子を同等に扱い、ちゃんと理由を述べて説明する口ぶりに、父の優しさと感じた。

ある日一人の園友が裏山の草むらで、蛇の抜け殻を見つけた。さあ大変、さっきまでは何の変哲も無いただの山が瞬く間に魑魅蒙昧の潜んでいる密林に変わり、僕も慌てて家に帰る途中、スリッパの入った袋をどこかに振り飛ばして帰り、そう言ったら母は呆れていた。

小学校

母に「あをきはるを」と筆で書いてもらったハンカチを胸に、群山公立尋常高等小学校の1年生になった。入学祝いに、祖父は栄町2丁目の東端にある小副川さんの店で、赤い20インチの自転車を買ってくれた。普通の大人の車輪の直径は、26インチか28インチだった。2、3日で補助輪をあげてしまうと、急に行動半径が広がり、新しい朝鮮人の友達が増えた。止める仕草をするので止めて降りると、「ちょっと乗ってみよう」と言う、それが「ジョットドッテ、ビヨウ」が半分入った発音である。「いいよ」と渡すと、ヒョロヒョロとすぐ倒れるので、もっとはやく動かすと倒れないよ、などと教えあった。

このころ近くの誰かが亡くなって、横丁を葬列が通って行った。「エンヤラチャーホ」と聞こえる掛け声とともに、巨大な柩を白い着物に黄色い粗い麻のような帽子の多くの人が担ぎ、上端の四隅からは長い棒が張り出し、色鮮やかな薄い布が張り巡らされて、薄い天蓋のように風に^{ひらめ}閃いていた。ひつぎはその柩の中にあるのが見えた。多分遺族だと思われた麻色の着物に藁の腰縄をした人たちが続き、声をあげて泣く何人かの女の人の後に、白い服を着た会葬者の長い列が続いた、それが初めて見る朝鮮式のお葬式だった。

一年に何回か「父兄会」というのがあって、名前と違ってその日は一人か二人の男、あとはお母さんの一群が教室の後ろにいた。「朝鮮のお葬式を見た人いる？」という話が途絶えたころ、僕が手をあげて「エンヤラチャーホ」と言って後ろを見たら、母が恥ずかしそうに真っ赤な顔をしていたのを覚えている。

小学校では、初めてリン・ショウコウという名の朝鮮人の同級生ができた。門構えの彼の家はすぐ近くの裏通りにあったので、よく遊びに行ったりきたりするようになった。一緒に学校から帰る途中、「あそこにお母さんが」と言ったら「あれは父の妻だが、僕のおかあさんじゃない」と言われて、朝鮮の一夫多妻制に触れた卵屋との会話は、祖母の冗談ではないことがわかった。

祖父は米の運送が、牛車からトラックに移り始めたのを感じたのか、そろそろ現役を

退く時と思ったのか、急に自分の作った家の改造に取り掛かった。それは居間をオンドルにすることだった。

祖父は知り合いの朝鮮人のオンドル屋さんに頼んで、仕事は床下の土を出し底石を敷くところから始まった。オンドル屋さんは一段階毎に軽く木を燃やして、煙の漏れを丁寧に塞いでいった。石底の上に煙がたどる迷路を石の壁で作って、その上に平たい石の床を作り、間を泥で塞ぐのだが、仕上げは煙が漏れださず、隅から隅まで真っ平らになるまで、何度も生乾きの試し炊きを繰り返した。焚き口は炊事場に、煙突は裏の路地に出るように作られた。

その下拵えが済むと、白い手漉きの紙が幾重にも糊で貼り付けられ、それが乾いた時、横丁の東文堂から来た厚い黄色な油紙が貼られ、紙と紙の継ぎ目には幅10センチほどの油紙が、十文字の交差点には八角形の油紙が貼られて出来上がった。炊き初めの暖かい床で、オンドル屋さんを囲んでの打ち上げが行われた。

その年の11月、祖父は肺炎になった。母は僕に「手を握ってあげなさい」と言い、祖父は新しいオンドルでこの世を去った。73歳だった。

1年生の終わりに学芸会があった。箱の中の生きて歩き出すおもちゃに持ち主が命令するという筋だったが、持ち主が軍刀を持った指揮官で、おもちゃの1組は「爆弾三勇士」だったところに軍国主義の影が見える。僕は「牛若とうとう（俺に）謝った」と歌いながら舞台に出て行く弁慶の役で、歴史は捻じ曲げられることを教えられた。

男女4年生にして席を同じゅうせずとか、1組と2組は男子、3組と4組は女子と別れることになり、1年生の時から隣の席にいて、大人になったらなんとなく結婚する予定だった何とかと言う大きな女の子もいなくなった。

世をはかなんで、読書で気を紛らわそうと1丁目の藤村くんと一緒に、府庁の裏の図書館に行った。彼はいち早く「俺の本があったぞ」と本棚の藤村全集を見つけた。一生懸命青木全集というのがないか探したが、無い。まあ一字だけでもいいやとブタ木全集というのを借りた。何か内地の湿っぽい暗い話で、振り仮名が無かったので、明るく日返しに行った。館長さんに「早かったね」と言われたので、「はい読めるところはみんな読みました」と言った。

ニャンコ婆ちゃんのお経

祖母にはお姉さんがいて、猫を飼っていたので僕たちはニャンコ婆ちゃんとよんでいた。よく遊びにきて、泊まると朝一の仕事は、仏壇の前に座ってお経を上げることだった。ところがそのお経は本に書いてあるのではなくて、その日、その日新しくできた即興のお経で、内容は名前を並べただけであった。

「タンゴウのアナ王子様」という正体不明の人物「あの世にいらっしゃるヒョウおつつあま」という先祖らしい名前、「乃木大将様」「明治天皇様」までご登場になる。しかも体を揺すってものすごく真剣なのだ。時々振り向いて「ご飯まだ？」と聞くのもおかしい。僕ら3人兄弟はこの時だけは後ろに並んでお参りし、笑いを抑えるのに苦労したものである。彼女は、ご主人と二人で、すこし表通りから入った薄暗い倉庫の一部に住んで居た。なんだか訳ありだが、子供の聴くことではなさそうだった。

宗教

群山に住んでいる日本人は群山神社の氏子とみられ、そのお祭りはみんなのものだった。祖父は氏子総代に選ばれたことが嬉しそうだった。各個人の宗教は神道、金光教、天理教などの神道系、真宗、真言宗、臨済宗、日蓮宗などの仏教系、それにキリスト教があり、葬式の時わかった。「おーおー」と言いながら托鉢に来るお坊さんも。「ポン、ポンポン」と団扇太鼓を叩きながら来る坊さんもいた。寄せ集めの租界なので、人口の割に種類が多いのかもしれない。

朝鮮人はほとんどプロテスタント系のキリスト教徒で、群山唯一のアメリカ人宣教師家族は、通称マックイチャンという名前で、群山唯一の自家用車の持ち主でもあった。毎日曜には郊外の家から、群山の教会に出て来た。大きなホワイトウォールの車輪のついたオープンカーで、ふんぞり返った赤ら顔の大男がプカプカと警笛を鳴らしながら狭い道を通っていた。丘の中腹の教会に上がる階段は、毎日曜白い着物の人でいっぱいになり、滝の水のように見えた。仏教は山の中には生き残っているという感じで、遠足でそういう朝鮮寺によく出くわした。

咸悦

小学2年の時、父は咸悦かんえつに転勤になった。咸悦に群山から鉄道で行くには、まず南へ群山線1時間で裡里、湖南線に乗り換えて東へ二つ目で、次は江景である。しかし三南自動車会社のバスだと乗り換えがない。三南とは慶尚南道、忠清南道、全羅南道の三つに渡る地域で、鉄道が表道路ならバス道路は裏道で網目が細かい。僕は月曜から金曜までを祖母と暮らして群山小学校に行き、土日を父母弟妹と咸悦で暮らすことになった。

最初に市場へ行く途中の三南バス会社に行くと、江景行きのバスの準備中であつた。当時はもうガソリンがなくなって、バスは木炭ガスで動き、車掌さんがバスの後ろのガス発生機に炭を入れて通風ポンプのハンドルをガーガーと回して火を起こしていた。こういう裏通りは運転手さんも乗客も朝鮮人が多かった。ちょっと上り坂になると力が足りなくなって、車掌さんが降りて炭を足し、ガーガーとやる時もあった。僕は終点の江景(たぶん錦江が見えるところなのだろう)まで乗り越してしまわないように、一番前の席に乗った。

父はその出張所長で事務員は二人、事務所続きに所長家族の住む官舎があつた。めぼしい建物は駅と郵便局、店一軒とこの事務所で、田んぼの中の小さな村だった。水道がなく、夏、井戸で冷やしたスイカは美味しかった。父は、事務所から帰ると習字の稽古をしていた。母のように達筆になりたいと思ったのかもしれない。

咸悦には日本人小学校がなかったので、妹が一年生になる年、父は役所をやめて群山の会社に転職した。二つに分かれていた一家は、また一つになった。

戦争

小1の頃、もう蒋介石との支那事変は始まっていた。出征兵士を送るため、旗を持って群山駅へ行った。しかし実感はなく「天に代わりて不義を打つ」を「天井に金槌、釘を打つ」などと変えていた、

小5の頃、号外で「我奇襲に成功す」とあり、真珠湾で九軍神がなくなったとあった。父は黙っていつものように会社に行った。町の音楽は「酒は涙か、ため息か」から軍艦マーチばかりになった。

学校の講堂に集まって陸軍の宣伝係の将校が、敵の大統領は「弛^{ゆる}ふんどし」という意味のルーズベルト、シンガポールは「芯がぼろ」だから、などという講演を聞いた。この頃校庭の隅に御真影奉安殿という小さな建物ができ、校長が四大節には白い手袋をして、中の天皇皇后両陛下の写真を式場の講堂まで運んだ。名前が小学校から国民学校に変わったのもこの頃である。

このころから「供出」という言葉が使われ始めた、国のために差し出すことで、その手始めは短波ラジオだった。お寺の鐘が金属供出で姿を消したのもその流れだった。3階の新校舎の屋上からは、三条の布が下げられた、「内鮮一体」「国体明徴」のふたつまでは覚えている。

読み物

その頃小学校のすぐ横に本屋さんがあって、月刊誌を毎月配達してくれた。『キング』は父、『主婦之友』は母、『小学何年生』は僕、祖母はそれら全部を読む決まりだったが、小4で『子供の科学』、小5で『航空朝日』に変えた。鉄道好きから飛行機好きに変わったのはこの頃である。

受け身

小学校の5年の時武道が課せられた。剣道は道具が面倒なので柔道を選んだ。初めは受け身をしばらく教わった。その後投げに入ったが、僕は小さかったので、投げるのに楽だとみた級友たちは僕を投げに来る。そこで受け身を知っていることがどんなに大切かが、その時も、その後でもよくわかった。

旅行

学校では4年生が裡里（今の益山）、5年生が全州、6年生が京城と、修学旅行の行き先が決まっていた。裡里では放送局の見学に行った、全州旅行の前に「いつもの太巻きを作る時間がなかったので、これでパンでも買いなさい、ごめんね」と母に謝られた。いや何も謝ることはないのに、とその日に巻き寿司のないことよりも、1年生の時から作ってもらった数しれないお弁当の苦勞が身にしみた。母に謝られたのはこの時だけだが、それ

は今も忘れられない。

全州は李朝の太祖が生まれたところで^{註5}、群山のような向こう岸が見えないほど広いドブ川べりに出来た新興都市ではなく、古都の趣があった。川の幅が狭く水が澄んでいるのも、丘上の梧木台、川面に突き出した寒碧楼なども風情があった。帰りに専売局の煙草工場に行った。

6年の時は行き先が京城で群山線、太田まで湖南線、あと京釜線と二回乗り換えて、1日目の夕方着く、宿は越後屋とか上総屋という内地の旧地名がついた修学旅行専門の宿だった。おきまりの徳寿宮、動物園のある昌慶園などを巡って最後の晩、大部屋の片側に積んであった布団の上からどこまで飛べるかの競争をしていると、ベキベキという音がして、下の部屋から「キャーッ」という女中さんの叫びとともに、煙のような埃が舞い上がってきた。その次の年から、その旅館からは群山国民学校にはお呼びがないそうである。

卒業旅行

ただ一つ残っていた卒業式をサボって、母に連れられて内地に行った。京釜線では白いテーブルクロスのかかった食堂車でライスカレーを堪能したが、乗り物に弱い母は気分が悪くなり、なんとか介抱してやっと夕方に閔釜連絡船に乗り込んだ。

翌朝下関の棧橋に着く。生まれてから昨日まで1435mmの標準軌を見慣れた目には、在来線の軌間は1067mmと狭く車両は華奢に見えたが、この軽便鉄道の軌間は762mmで、可愛い客車は車が四つあるだけ、小さい蒸気機関車の「ピーッ」という甲高い汽笛が耳に響き、母の育った終点まで行った。吉部の山の緑は、朝鮮とは違った潤いがあった。吉部では母のいとこの家に泊まり、近くの万倉のおじさんにも挨拶に行った。それから長崎の父の生家に寄り群山に帰った。

群山中学校

英和と和英の中辞典を買ってもらい、まだ「広」が付く前の『辞苑』を下ネタを求めてあちこち読んでいた間に、石川啄木という名前が目に入り、ブタ木では無いことがわかって顔が赤くなった。新しい制服と靴を履いて入学式に行った。中学校は南の町外れにあり、家からは歩いて40分ぐらいの距離で、最後は畑の中をしばらく歩いた。

慣れると畑の土の色と、作物の出来で誰の畑か見当がつくようになった、土がいちばん黒々と肥え、作物の出来の良いのはシナ人の畑、あと日本人、朝鮮人の順だった。

入学式が終わると、上級生が一人来て「お前ちょっと来い」というのでついて行くと、兵器庫の裏に連れて行かれた。一体何？と思っている間に肩から斜めに太鼓の帯をかけられ、バチを渡された。「こう叩け」と言われて、先輩の通り「パパパッパ、パ　パ」と進んでしばらくすると「こいつ、もうチョージョーを覚えた」とさらに上級生に報告し、「明日昼休みにまた来い」と帰された。

一週間たつと大太鼓とラッパ隊の顔合わせがあり、大太鼓は二級上の増岡さんの次男とわかった。「なあんだ虎ちゃん大太鼓なんだ」と言おうとしたが、軍隊では二階級上に

あたるので、辛うじて黙っていた。ドン パパパッパ ドンパ ドンパ、それにラッパが節をつけると長上に対する敬礼、がなんとかサマになっているのが面白かった、こうして僕は軍楽隊の小太鼓を叩くことになった。

いちばん上の5年生は、冬は黒、夏は青に白い点々の制服だった、4年生以下は 夏も冬もカーキ色だったが、学年ごとに色合いが微妙に違い、生地も夏冬別の頃はしっかりしていたが、年が下がるに連れてすぐヨレヨレになるスフになり、服を見れば何年生かがわかった。

中学校は兵隊さん製造所みたいに扱われて、先生には停止して挙手の礼、上級生には歩きながらでいいが、答礼の手が降りるまで挙手の礼を続けることになっていた。先生は数が少ないからいいが、新入生には面倒だった。僕などは近所は迂闊に歩けなくなった。

先生方も、詰襟の国民服というカーキ色が多かったが、中に白いハイカラーに黒い蝶ネクタイの美術の先生がおられた、パリに長くいて絵の勉強をされた方で、別に変わった目だとは思わなかったが、フランス人からは「釣り上がり目」と人種差別されたらしく、ヨーロッパのアジア人蔑視の話なども参考になった。

それから、国文法と東洋史を教える先生がおられた。歴史とお話は表裏一体だということ^{たいこうぼうりよしやう}を地で行く授業で、太公望呂尚という人名や酒池肉林、四面楚歌のような四字熟語も、出た場所と一緒に習い、歴史は退屈な暗記物ではなく、めっちゃう面白いことを教わった。日本語の文法も「打ち消してイ段に響けば上一段」という言葉で覚えた。

体が大きいため、僕ら日本人をいじめていると勘違いしていた地理の先生は、同じクラスの大い朝鮮人の生徒を目の敵にしていたので、同情した僕らは「あいつ来るぜ、ちょっと隠れるよ、俺たちがかくまってやるから」と彼を屈ませ、人垣で囲み、大声でおはようございます、などと陽動作戦に出たものである。

先生には、みんなあだ名がついていた、いつも額をしかめていて、餡パンと区別するためにつけた捻りに似ている数学の先生は「豚パン」、悪人を思わせる目つきの悪い英語の先生は「ギャング」という具合である。ただ目つきに似合わない優しい先生とわかって、「ギャンサバン」などと朝鮮語もどきの尻尾^{しっぽ}をつけたりした。

武道は必修で、柔道は骨がおれるからと母に言われ、剣道部に入った。冬の朝、暗いうち学校に着いて、冷たい床を裸足で歩く寒稽古もさることながら、夏の昼間にお面をつけて汗だくになる土用稽古も楽ではなかった。

入学して1月、勤労動員というものに駆り出された。農家の働き手は戦地に行ったので、まず田植えをやらされた。なんだかむず痒いので泥水から足を上げると、黒い太い毛が生えている、それが生まれて初めて見る^{みる}蛭だった。慌てて田んぼから出ようとしたが木刀を持った教練の先生が畔に立っている。家に帰ってよく見ると赤い噴火口のような窪みがあちこちにあった。田植えの時期が終わるのが待ち遠しかった。

1942年の2月、落下傘部隊がジャワのパレンバン石油基地を占領した。それを歌った高木東六の歌にだけは替え歌がなかった。いい曲だと思った。

中学には、試胆会というのがあって、1年生は夜集合を命じられた、校内の数カ所を夜一人で回るもので、上級生が変装してあちこちに隠れているらしい。4年生の柔道4段の徐さんが2年生や3年生を前に、僕をさしてこっそりと「こいつあまりいじめるなよ。こいつのばあさん怖いんだ」というのを聞いて、ありがたいやらおかしいやら、歩き方から

してノッシノッシと、いかにも柔道の猛者らしい徐さんの優しい一面が嬉しかった。

中1の頃、上原君というお互いチビ同士の親友ができて、よく自転車で田舎に出た。僕はまだ赤い自転車、彼はお父さんの自転車の横棒が高いので下側に足を突っ込んで乗っていた。ある日曜、ポプラ並木の全群街道を走って、最初の駅「開成」^{かいせい}にきた。ふとチビ仲間で朝鮮人の幸井君の家がここにあるのを思い出して行ってみた。自転車から降りて汗が吹き出すのを見て、幸井君のお母さんは冷たい井戸水をくださった。飲もうとすると「ちょっと」と遮って砂糖を入れてくださった。その時の身にしみた親切と美味しさは忘れられない。2年生の1月父は転勤になり、北朝鮮の咸鏡南道の咸興中学に転校した。

咸興中学校

咸興は京城から東北に進み朝鮮半島の脊梁山脈を越えた日本海側の港町、元山に出て、さらに北に行ったところにある。山越えの区間はデロニという電気機関車が担当し、平地はパシシ(Pacific 2-C-1の改良4型)だった。

国際列車

国際列車は釜山発、満州国の首都新京行きの「のぞみ」と釜山発、北京行きの「大陸」があって、新義州まではパシコ(Pacific 2-C-1の改良5型)が担当した。寒いところだからと、新しい生地はもう入らない時だったので、母は祖父が着ていたインバネスというマントを学生用の外套に改造してくれた。黒いみんなの外套と違って、少し緑がった濃い灰色が祖父に抱かれているような気がして嬉しかった。

咸興は当時の人口は20万、咸鏡南道の道庁所在地であったが、南の近くに興南という工場の町があり、その真ん中の吹きっさらしの、荒れ野の中にポツンと咸興中学は立っていた。中学の近くには「本宮」という限りなく無人駅に近い駅があり。周りに家はほとんどなく、生徒の半分は北の咸興から、あと半分は南の興南から全部汽車通学の学校だった。

確か僕と一緒に転校して来たのは他2名で、学校の授業もさることながら早速勤労働員に行かされ、興南の工場内に空襲の際の待避所を作る仕事をさせられた。体の大きい方は、鉄板の上でセメントと砂をスコップで混ぜ合わせる仕事、僕らちびっこはそれに加える水を運ぶ役目だった。折から食料の配給は毎月悪くなり、その頃は、半搗き米が半分、崩した大豆粕が半分になっていた。工場の勤労働員の長所は、お米と高粱の半々が出るということだった。少なくとも高粱ではお腹を壊すことはなかった。

この工場には新興鉄道という狭軌の私鉄の方が便利ということで、それを使うことになったが車両が混んで、ノミやシラミが移り、家に帰ると母は眼鏡をかけてシラミ退治に忙しかった。

待避所作りが終わると、セントクという飛行場の拡張工事に泊まりがけで従事することになり、大きな格納庫の中の三段の寝床に住み、味噌汁に乾燥野菜という食事であった。文字通り寝食を共にしたので、転校生でも早く溶け込めた。拡張工事は朝鮮人の専門家の指示に従った。重力で崩れない角度にスコップで土を固めることを、日本語で「ノリをつける」ということを、この専門家に教わった。

夏、家に帰ってから近くの機関庫へ絵を描きに行った。すると誰かがきて、「何をしている」と聞く。「絵を描いています」というと「どれ見せろ」と言い、僕のヘタを見たって何にもならないと思ったが、聞き入れられず、「敵の手に渡ってはいかんから」と没収された。憲兵だと言うことだった。

仕事の合間に学校へ行った。先生に日本人は愛国心が強いことを、朝鮮人に見せなくてはならないと言われ、陸軍はビンタなどで気が向かないので海軍にし、海軍甲種予科飛行練習生(予科練)に応募した。体が小さいから、体格検査で落ちるものと思っていた。

授業が延びていつもの通学列車に乗り遅れると、次に来る貨物列車の車掌さんの好意にすがる他ない。車掌車は、長い貨物列車の一番後ろについているので、吹雪の中をプラットホームのない遥かはずれまで歩いて待った。運がいいと乗せてくれ、真っ赤に焼けたストーブでポカポカと暖かい車内を楽しむことができた。

たまに家に帰ると、燃料も配給になって風呂が沸かせず、銭湯に行った。帰りに濡れたタオルがカチカチに凍り、チャンバラができるほどだったが、やがて手のぬくみで溶け、ぐにやりと下を向いた。ここの特産物は明太で、子は塩漬け、親はその辺りに放り出しておくですぐ凍って、冷凍干し明太が出来上がるほどだった。この辺りはりんごがよくできた。でも朝も昼も晩もと、焼きリンゴ、蒸しりんご、生りんごで、オナラまで林檎の香りがしても、ご飯がないと腹が減った。

寒くなると霜焼け組と赤切れ組に別れた。僕は前者だったが、後者の母は見るも気の毒だった。父もそう感じたのか、翌1月南朝鮮の全州に転勤になった^{註6}。

全州南公立中学校

ここは小学校五年の時修学旅行に来たところで、駅の作りが朝鮮の伝統形式だった。もう学校の授業はほとんどなく、早速徳津というところの松根堀に行かされた。ここは前は松林であったと思われるが、それはみんな切り倒され、僕らの仕事はその残り、すなわち切り株から下の根を掘り出すことであった。何かの油の元になったらいい。毎日の割り当て量が決められていて、掘った根の重さがその数字に足りない時は、夜暗くなるまで掘らなくてはならなかった。もうこうなれば朝鮮人内地人の区別はなく、両方寄れば文殊の知恵、根の股に粘土をつけて重さを増やした。

転校して間も無く、海軍から通知が来た。思いがけなく合格であった。入隊は1945年6月、僕は全州神社でお祓いを受け、15歳で慣れない配給の酒を飲み、旧友の寄せ書きの旗を持って、何か書かれたタスキをかけ、町内の有志と、総出の中学生に送られて全州駅に行った。活気溢れる軍歌と旗の波もさることながら、駅の柱に半分身を隠して、ひっそりと見守っている母から目が離せなかった。

この列車には他にも出征していく人たちが乗っていて、裡りの駅では父と弟妹に別れを告げ、竿を渡し寄せ書きの旗だけにした。見送りの群衆の中に群山小学校の5年生の担任だった久武先生が、もう動き出した汽車と一緒に走りながら「青木、お前もいくのか」「はい征きます」で、ホームの終わりまで来ていた。

釜山では出願した咸興中学の連中と同じ宿になり、前の連絡船が沈められたので船待ちをすることになった。何日か待った後、朝暗いうちに乗船を命じられ、前に3本、後ろ

に3本ぐらいの竹を結びつけた救命胴衣をつけ、夜が明ける頃釜山港をでた。見ると連絡船はもう一隻いてその両端を駆逐艦が護衛していた。右の船が前に出たり、左の船が前に出たりするので「之字運動」をしているのがわかった。こうして、生まれ故郷朝鮮に別れを告げた。

註

- 1 「ヨンゲンムルサショ、チェンムーリーヨ」は「ヨンゲン水はいかが。いい水だよ」の意味で、「ヨンゲン」は良い水の出る地名を指すと思われるが、「チェンムーリーヨ」は「冷たい水だよ」と解することができるかもしれない。
- 2 群山にある李盛堂は、1945年開業した韓国最古のパン屋と言われる。この町で断トツの有名なパン屋で観光スポット化しているが、その前身は木村屋ではなかったかと考えられる。
- 3 搗きたての餅をあげたり、そのお返しにキムチをもらったりというやりとりは実際にはあまりなかったし、もらったものを食べたわけでもない青木はメールで教えてくれた。「僕らはキムチが美味しいと思ったことはないし、すぐ硬くなるような日本式の餅を朝鮮人が食べないことも分かっていて」と氏は言う。
- 4 ホンソ息子とは最愛の子の意味。「こんこはわしのほんそでの」とは「この子は私の可愛い子でね」の意で、出雲・隠岐の言葉とされるが、祖母の出身地である四国でも使われていたという。
- 5 李朝の太祖は実際には和州（現在の咸鏡南道金野郡）の出身。本貫が全州李氏であるため誤解が生まれたと思う。
- 6 青木は中学時代に何度か転校したこともあって、多くの校歌を覚えている。1960年夏、ネズ・パース保護地に向かう途上、見渡す限り平たい砂漠の中を一直線に道が延びているところに差し掛かる。目の届く限り、生きているのはおれひとりではないだろうかという感じがしてくるところだが、青木はそんなときに校歌を歌い始める。

くこういうとき、わたしは歌を歌う。生まれ故郷、朝鮮全羅北道群山府の小学校の校歌から始めた。「錦江の水滔々と、流れて深き南岸に、物資豊かに集まりて、港をなせる群山府」というのが歌いだしである。それから、「湖南平野の明けの風」で始まる群山中学校校歌。それから、わたしは北朝鮮の咸鏡南道咸興府の咸興中学へ転校した。B29の超高空偵察群が作る無気味な飛行機雲をにらみ上げながら、隣の町、興南府の化学工場へ学徒動員に行ったものである。おかげで咸興中学在学一年のほとんどは、学校を素通りして工場通いに費やした。「祖国の息吹きひたひた迫る、日本海の尊き黙示」という咸興中学校校歌は、そのような祖国日本の危機を、植民地の遠くから見たとき、特別の意味を持っていた。これは歌う在校生を持たない校歌である。もう簡単には行けない外国になった母校の国を思うとき、世の移り変わりをしみじみ感じさせられる。

終戦の年、父は全羅北道の道庁のあった全州府に転勤になった。「麒麟が峯はそそり立ち、全州川は水清し」で始まる新しい校歌を覚えたか覚えないうち、わたしは朝鮮・満州からの最後の人的資源の補給船、駆逐艦に護衛された関釜連絡船「興安丸」に乗って最後の予科練として祖国日本へ旅立ったのであった。思えば十五年前の同じ月、六月のことである。わたしは十五歳であった（『滅びゆくことばを追って』15～16頁）。